

神名は迦微能那波と訓べきことも、首巻に云り、迦微と申す名義は未思得ず、

旧く説けることども皆あたらす、

さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐい海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり、

すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば、神と云なり、さて人の中の神は、先かけまくもかしこき天皇は、御世々々みな神に坐こと、申すもさらなり、其は遠つ神とも申して、凡人とは遙に遠く、尊く可畏く坐ますが故なり、かくて次々にも神なる人、古も今もあることなり、又天人にうけばりてこそあらね、一国一里一家の内につきても、ほどほどに神なる人あるぞかし、さて神代の神たちも、多くは其代の人にして、其代の人には皆神なりし故に、神代とは云なり、又人ならぬ物には、雷は常にも鳴神神鳴など云ば、さらにもいはす、龍樹霊狐などのたぐひも、すぐれてあやしき物にて、可畏ければ神なり、木霊とは、俗にいはいゆる天狗にて、漢籍に魑魅など云たぐひの物ぞ、書記舒明巻に見えたる天狗は、異物なり、又源氏物語などに、天狗こたまと云ることあれば、天狗とは別なるがごとく聞ゆめれど、そは当時世に天狗ともいひ木霊とも云るを、何となくつらね云るにて、実は一つ物なり、又今俗にこたまと云物は、古山彦と云り、これらは此に要なきことどもなれども、木霊の因に云のみなり、又虎をも狼をも神と云ること、書記万葉などに見え、又桃子に意富加牟都美命と云名を賜ひ、御頸玉を御倉板拳神と申せしたぐひ、又磐根木株艸葉のよく言葉したぐひなども、皆神なり、さて又海山などを神と云ることも多し、そは其御霊の神を云に非ずて、直に其海をも山をもさして云り、此らもいとかしこき物なるがゆゑなり、

抑迦微は如此く種々にて、貴きもあり賤きもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪きもありて、心も行もそのさまさまに随ひて、とりどりにしあれば、貴き賤きにも、段々多くして、最賤き神の中には、徳すくなくて、凡人にも貧るさへあり、かの狐など、怪きわざをなすことは、いかにかしこく巧なる人も、かけて及ぶべきに非ず、まことに神なれども、常に狗などにすら制せらるばかりの、微き獸なるをや、